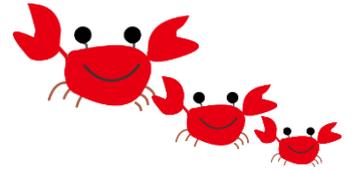


第118回日本外来小児科学会報告

2015. 4/17-4/19 大阪



① 1歳未満の中耳炎：

0-1歳で3日以上38℃以上の発熱が続いた場合、70%に中耳炎が関係している。危険因子としては、i) 集団生活、ii) 両側、iii) 鼻副鼻腔炎併発など。



② 股関節脱臼：

長らく先天性股関節脱臼と呼ばれてきたが、生まれつき以外の要素も多いことがわかってきた。最近では、発達性（発育性）股関節異形成とも呼ばれるようになった。女兒、左側、冬に生まれた子、単殿位（両足を伸ばした状態の逆子）、母が股関節脱臼だった児などが発生しやすい。抱っこするときに、両足を伸ばしきった状態にしないことが大切。スリング、〈おひなまき〉は避けましょう。

③ タンデム・マス・スクリーニング：

多くの種類の先天性代謝異常症が見つかるようになってきたが、それぞれの疾患の赤ちゃんの数は少ない。判断に迷った時はコンサルセンター（03-3376-2550）に問い合わせを。



④ インフルエンザワクチン：

2015.10月からのインフルエンザワクチンはA型2つ、B型2つが入った4価のワクチンになります（米国と同じ）。経鼻^{けいび}のワクチン（フルミスト）が開発されましたが、顔面神経麻痺の報告が見られるようになり、日本ではまだ一般的ではありません。



⑤ アレルギー疾患の発症・重症化予防：

妊娠・授乳中の母親の食物制限は意味がない。離乳食の開始が遅い方が、2歳におけるアトピー性皮膚炎の発症が多い。アトピー・湿疹があったら、原因にかかわらず、スキンケアと塗り薬で治療を。



⑥ デング熱：

ヒトスジシマ蚊が媒介。水が溜まったところで繁殖する。たまり水をなくすことが予防につながる。流れている水は大丈夫。これに、出血症状が加わると、デング出血熱。デング熱の重症型である。

⑦ 日本脳炎：

日本では毎年、2-9人発症している。東南アジアでは数千人。接種を見合わせていた時期があったが、数年だけなので、発症数には影響していない。40-50代の抗体価が低い。

⑧ こどもの事故：

accident といわれていたが、コレは予測できないことに対する単語なので、

今では injury を使う。訳は傷害。予測・予防可能な事象。不幸にして傷害でお子様をなくされた場合、グリーフケアが大切。「クローバーの会（小さな子供を失った人のグリーフケア）」がある。



⑨ けっせつせいこうかしょう 結節性硬化症の新しい薬物：

エペロリムス。合併症の腫瘍を縮小させる効果が知られていたが、認知・行動面を向上させる効果があることがわかってきた。主な副作用は口内炎と高脂血症。



⑩ 近年の平均出生体重：

出生時体重は3kgといわれていたが、最近は2.8-2.9kg。2.5kg未満の低出生体重児は全出生の10%。子宮内発育不全の児が増えている。胎内低栄養の影響が、成人の病気と関連していることがわかってきた。

⑪ 女性の2次性徴：

13歳で乳房腫大が見られない方、15歳で初潮がない方は精査が必要。18歳で初潮が見られない時、原発性無月経という。3か月間月経が見られない時、続発性無月経といい、運動性無月経、体重減少などが原因としては多い。



⑫ EC (emergency contraception: 緊急避妊的な避妊)：

ノルレボ錠 0.75mg を1回2錠服用。日本では婦人科などの医師の処方箋が必要だが、海外では薬局で買えるところも多い。月経困難症にはLEP製剤。

⑬ 10代後半の喫煙率：

増税、自販機での購入制限などにより、37% (1996) から9% (2010) に減少した。

